

「目的を果たすための羅針盤とリーダーシップ」

～そして聞き従わないもの～

使徒 27:1 ~ 28:28

■ 十字架の道行＝目的に導く羅針盤

パウロがエルサレムからローマに向かって行く最後の旅です。目的に向かっていく羅針盤が必要になりました。イエス キリストは十字架に向かってパッションを持って進みましたが、十字架に行く道を支えたのが羅針盤です。羅針盤とは、「目的に基づく方法」です。パウロも自分の人生がわかっていました。自分の目的は、ローマに行ってそこで異邦人に伝えるんだ！という強いものでした。イエス キリストは十字架、パウロはローマだったのです。このことがよくわかっていたので、パウロは舟で275人が右往左往していても迷いませんでした。自分に与えられている将来の目的がなければなりません。その目的が定まっていなくて、私たちが判断はいつも、人間的な情や思いや安全な道によって、成し遂げられようとしています。私たちにあって大事なのは、自分の目的が定まっているか、ということです。パウロはなぜ、エルサレムでも勝利し、王の前でも正しく証言し、自分を訴えてくる人に正しく証できたかということ、自分はこの先ローマへ行くということがわかっていたからです。パウロが目的としているのはローマという地域ではなく、異邦人の元に自分は遣わされる、ということです。自分の使命なのです。だから間違わずにすんだのです。

間違わずにすんだ判断基準は、自分が間違えていた者だということを知っていたという事です。だから彼は強いリーダーシップを持ちました。リーダーが持っているといけな強い強い強い、このひとつの目的に進んでいくために絶対に妥協しないということです。それが達成されれば、組織は絶対うまくいくのです。ところがこれが失われると、組織は崩壊します。リーダーになる皆さん一人一人が、ここに妥協することが問題なのです。私たちは、譲ってはならないことを譲り、譲らなければならないことを譲らないという生き方をしています。だから目的を達成できません。パウロはなぜこのたいへんな航海で全員を助け、かつ、囚人からリーダーへと変わっていったのか。妥協してはならないところで妥協しなかったからです。戦ったのです。

私たちは、自分の目的のためにやろうとしてしまいます。自分の思いが先立ってしまうのです。これは愚かなことです。神さまが与えた目的だけけれど、目標は自分の方法にしてしまうこともあります。この中で重要なのは、私たちは自分は罪人の頭で、自分は愛が中心なんだということを理解されていなければなりません。罪と愛が理解されていれば、自分は罪人だったのだから人の罪に憎しみはわきません。もし、自分の罪が理解されていないのなら、相手の罪が目に入り憎しみがわきます。これが、「裁き」というものです。

私たちはこの世の中目で見ると、あたかも真っ白な生き方をしているように思います。しかし、真っ白な中で自分を見ると、自分がうすら汚れていることに気づきます。皆さんは何と比較して自分を見えていますか？雪よりも白くされたイエス キリストの愛は、私たちに汚れた部分を示します。すると、うすら汚れた自分を知っているから他人を裁くことにはならないわけです。しかし、自分の罪を知らない人は、自分が正しいと言って、妥協してはならないことに自分を妥協させて、しなければならぬことを行えないのです。パウロがなぜリーダーシップをとれたのか、それは、自分の間違いを誰よりも知っていたからです。

私たちは、聞く耳と、自らが間違えていることをもう一度確認しなければなりません。神さまは私たちに伝えたい。「あなたは罪人の頭だ。だから人を裁くな。それは神がすることだ。」と。自分が失敗者であることを知っていれば、あなたは信念を曲げない立派なリーダーになります。なぜかというと、パウロが今までの生き方の失敗は絶対にやらないんだ！と、そこだけ貫いた、それだけだからです。神の思いだけを行うんだと決めたのです。だから、十字架の道行が目的に導くコンパスとして彼を進めたのです。ぜひ、振り返ってください。あなたが失敗する方法はいつも一緒なのです。神さまはあなたを責めるために過去を見せたいのではありません。もう同じ過ちを繰り返さないためだけに過去を見る、と言っているのです。あなたはダメだ、と言っているのではなく、「学べ」と言っているのです。

■ チェスタントンの言葉から

「狂人は正気の人間の感情や愛憎を失っているから、それだけ論理的であり得るのである。実際この意味では、狂人のことを理性を失った人と言うのは誤解を招く。狂人とは理性を失った人ではない。狂人とは理性以外のあらゆるものを失った人である。

「チェスタントン」

いろいろな解釈はあるが、「狂人は理性を失うことで、理性以外のあらゆるものを失った人」と解釈したい。大切なのは「理性」。理性は善悪を判断する力であり、感情に流されない力です。感情は神さまが与えてくださったものだから大事なのです。しかし、感情的に私達を変えようとしています。過去に基づく決断で、大切なものを失っていることに私達は気づきます。もう一度私たちは理性を取り返さなければならないと思います。チェスタントンという人は、人は社会が罪があって問題だと言うが、哲学の中で自分は自分自身に問題を見いだしたと言っているのです。理性があれば罪人であることがわかり、罪人であることがわかれば神の赦しが必要であることがわかり、神の赦しが必要なのは神に近づくことができるので、神が御力をあらわされるというサイクルがあなたに与えられるのです。神に力を与えられた私たちは、時々間違っただけで正しい道を損ねてしまう。だから悔い改める。それによって赦された私たちは学ぶ。だからもう一度神さまが赦す。そしてもう一度力が与えられて成し遂げる。そうするとだんだんキリストの身丈にまで成長していくことがわかります。

■ しかし、悲劇はひとつ

しかし悲劇はひとつ「私はまちがってない。」と思うことです。常識ではない知識に聞く耳を持たなければなりません。自分に与えられている神のことばに、それが当てはまるかどうかで判断するしかないのです。だから私たちは、みことばをたくわえなければならぬのです。自分に与えられている使命を知らなければ、あなたが正しい判断をする材料もないのです。まずなにしろ、「聞く耳」です。パウロは聞かない人でしたが、神から聞く人になりました。そして神から聞くことを通して、人々の情報を的確につかむ人になりました。自分の使命だから意地でもやり通すんだ！ではなく、全ての状況を見て時を見極める人に変わっています。成長したのです。あの嵐の時、水夫たちは経験のうえに楽な道を選ぼうとしました。その結果、2日間島から遠ざかる風に吹かれ続けたのです。経験で行動するということがおこるのです。過去の栄光は関係ないのです。それは全て神さまのものだからです。私たちは、今を正しく決断して生きているかどうか全てです。

さいごに

ジョシュ マクドウェルという人がいました。かれは、母に暴力をふるっていた父に対し、「殺してやる。」という憎悪がありました。母親はジョシュが高校を卒業するまでは辛抱すと決めていました。その決断の通り力尽きた母親はジョシュが高校を卒業して2週間後、父の暴力に耐えられず自殺しました。すぐに、父を殺してやろうとしたのですが、父は隠れていて居なかったので、殺すことはできませんでした。ジョシュはこの憎しみを抱えきれず、家を出て行きます。そんなある日、クリスチャンの友達が大学のサークルに彼を連れて行きます。そこで自分の存在意義がわかって、十字架の囚人の例えから「赦し」ということを知ります。6ヶ月後、父のところへ行き、憎しんだ心がうすれて父にひとこと言います。「父さん、僕はあんたみたいな親父だけ愛するよ。」妻の自殺、息子の家出でひとりになった父は、過去を顧みるようになっていました。そんな中で息子が自分を「愛している。」とのを聞いて、息子に聞き返します。「俺のようクソ親父をなんで愛しているなんて言うんだ？」するとジョシュは「俺もよくわからない。でもイエス キリストという人に出会って、何かわかった。何がわかったかわからないけど、なんとなくあんたを赦す気になったんだ。なぜかということ、自分も同じ罪人であることがわかったから。」と言ったそうです。この父の変わった姿を見て、その地域が変わりました。この父と息子の変化を見て、その地域は大リバイバルが起きたと言う話があります。

「主イエスを信じれば あなたもあなたの家族も救われる」ということばは、一人の人が自分の罪に気づいて、過去に生きないとき起こる奇跡だと思います。死に至るまで 神に 忠実に聞き従う者でありたいと願います。

(要約者:秋山恭子)

(2020年10月25日)